

新 年 を 迎 え て

農林水産省農薬検査所 ^{かき}柿 ^{もと}本 ^{やす}靖 ^{のぶ}信

新年おめでとうございます。皆さまには平穏な新春をお迎えのことと拝察します。さて平成も13年を迎え、干支でいえば二周目に入りました。これまでの12年間は政治、経済、教育、等々の分野でありとあらゆる難問が一気に吹き出した時代でした。そして社会不安のはけ口を求めるように、農薬を標的にした理不尽な批判が集中した時代でした。

本稿では、私が実際に見聞した例を紹介して、これからの12年間にこのようなことにならないよう願うとともに、私達自身も志を新たにしたいと思います。

第一例：化学農薬への依存を抑え、持続性のある農業に転換するという取り組みが活発です。昨年、私もN県とF県の様子を現地に見に行きました。交信かく乱剤による防除を、地域を挙げての努力には敬服しました。しかし標的害虫には効いても、従来の防除の常識では無視できた害虫がまん延するなど予想外の展開となり、結局は殺虫剤を使用しました。このため既に用意していた「農薬不使用ラベル」を貼れずに出荷したそうです。このような努力の山脈の向こう側に、彼らが目指す道があるのでしょうか、農家の苦労は大変です。

第二例：昨年9月ごろ、NHKが有機農産物表示の取得に努力する農家の様子を放映しました。その例では、その農家を使う水田用水から農薬が検出され、審査の結果、表示申請は結局却下されました。番組は中国産冷凍有機野菜が大量輸入される画面で終わりました。画面の農家はとても無念そうでしたが、「国土が狭く、病害虫が多発するこの国で、この表示を使えるほどの実績をあげるには、個人の力では限界がある」という審査を担当した人の言葉が印象的でした。

第三例：21世紀は世界的規模の食糧危機が心配です。人口爆発が続き、異常気象も進み地球上の農耕地が減少し続け、億単位の飢餓人口が既にいます。21世紀中に自給率の低い先進国を巻き込む食糧危機を心配するゆえんです。なのに自国の耕地面積の2倍強分の食糧を輸入している日本で、狭い国土の有効利用にもなる集約農業の必需品の農薬が「なぜこんなに嫌われるの？」と不審です。「自動車で毎年一万人が死に、負傷者はこの数倍。また医薬品の副作用や誤使用で大勢の死者がでてい

す。それなのになぜ農薬ほどには嫌われないの？」と疑問です。死傷者の多い自動車や医薬品に甘く、農薬には厳しいのは私には理解不能です。ディーゼル排ガスの危険を訴えてきた私には東京都の主張は拍手喝采ですが。

第四例：つくばの農水省の一研究機関で数年前の3月に会議がありました。「生物の多様性」が話題でした。ある来賓が、「日本の休耕田を干潟の埋め立てで行き場をなくした水鳥や渡り鳥の休息地にしてはどうか」と発言し、続いて彼は、「水鳥の飛来地となるには、餌となる多種多様な生物が休耕田に多数棲むことが前提だが、周辺で農薬を使っているは無理である。休息地となる休耕田の周辺の水田での農薬の使用は禁止してはどうか」という趣旨の提案をしました。来賓のK氏は大層著名な方だそうです。生き物と人との共生を説く立場から、「本来の生息地」を奪われた水鳥の休息地用に休耕田を提供しようという「一石二鳥」の話に会場から反対めいた声はありませんでした。

紙面の都合で上の四例でやめますが、松本のサリンの事件のように、理由もなく不安、心配の矛先を農薬に向けることを、そろそろやめないと、百年の大計を誤る気がします。

話はガラッと変わりますが、農薬検査所も本年4月に、独立行政法人へと移行します。

法人は、業務の効率化および国民へのサービス向上等の業務の質の向上の二つの観点から業務を整理し、国は検査所の業務の各々について、5年間で達成する目標を数値で示して、業務推進を奨励するものです。5年後の業務の成果が不評ですと、農薬の検査の仕事自体がなくなることはありませんが、できの悪い農薬検査所は廃止ということもあるので、上の話のようなことを感じたり考えたりする時間は、今後の私にはなくなります。

農薬の問題は感覚的にとらえると上の例に見た結果に終わります。近代精密化学の成果には注意・用心の心が不可欠ですが、冷静な視点と勉強が必要だと思います。日本人には苦手かもしれませんが、避けて通れないのが今の時代です。

かつて本省の農薬対策室にいたとき以来、徹底した女性不信になりましたが、今後の12年間で、女性が信じられ好きになれるようになりたいものです。これが私の新年の抱負です。